

I 研究計画

目指す子供の姿

多面的・多角的な思考を基に、対話を通して価値観を上げ、自己の考えを深めることができる

道徳科における納得解を導く姿を、「多面的・多角的な思考を基に、対話を通して価値観を上げ、自己の考えを深めることができる」と設定し、研究に当たる。

1 目指す子供の姿について

- (1) 「多面的・多角的な思考」とは、これまでの自己の体験から感じたり考えたりしたことや、友達が感じたり考えたりしたことを基に、様々な角度からその事象を考察し、理解することである。
- (2) 「対話を通して価値観を上げ」とは、自己の考えと他者の多様な考えを比較検討する活動や、自己の初めの考えと後の考えを比較検討する活動を取り入れ、考えを深めたり、上げたり、視点を変えたり、再構成したりすることである。また、友達の考えの底にある深い思いや悩み、価値観を察して共感的に理解しながら自己の考えを見つめ直すことである。
- (3) 「自己の考えを深めることができる」とは、対話を通して浮き彫りになった多様な価値観と自己の価値観を比べ、自己の考えや行為の傾向を知ったり、客観化して自己の在り方を多面的に検討したりすることである。さらに、導入時での自己の価値観と、授業後あるいは対話後のそれを比べることで考え方の変容に気付くことである。

2 これまでの取り組みについて

目指す子供の姿に迫るために、1年次は「考える必然性のある問いの設定」と「価値観を見える化し、子供の思考や認識を深める対話の設定」の2点について研究を進めてきた。成果としては、考える必然性のある問いを設定することによって、授業前の考えを見つめ直す姿を引き出すことができた。また、価値観を見える化したことで問題が焦点化され、子供の対話を促すことにつながった。しかし、課題として、発問や問い返しの場面において言葉をより吟味することや、対話の視点をより明確にするための手段について研究を深める必要があることがわかった。

3 研究内容について

目指す子供の姿に迫るために、2年次は研究内容として以下の2点に取り組む。

- (1) 価値観を見える化し、子供の思考や認識を深める対話の設定
問題解決の過程で、問いに対する多様な意見の大まかな種類や全体の傾向、主な意見の要点を押さえるなどして、一人一人の価値観を見える化し、それぞれの立場における考えを整理し焦点化することで、対話を促していく。
- (2) 価値観を再構成させる発問
価値観を再構成させるとは、学習によって得られた一定の解を再考し、新たな価値観を構成させていくことである。展開での主発問、自分事として捉えさせる場面での補助発問で、自己内対話や子供同士の対話を促し、再構成させていく。

4 研究・検証方法について

研究方法として以下の2点を取り上げ、子供の変容より研究内容の有効性について検証を図る。

- (1) 授業観察記録や授業の映像記録より、発問場面を書き起こしたプロトコルを基に分析を行う。
- (2) 子供の発言内容や道徳ノートの記述より、道徳性に関わる成長の様子を見取り、分析を行う。

(浅利 善仁)

6年2組教室

本時で目指す授業
人間の心の弱さを理解しながらも、きまりを守ることは、みんなが安全かつ安心して生活できる社会につながることを理解し、日頃から進んできまりを守ろうとする心情を育てることを目指す授業。

1 主題名 きまりを守るとは

2 教材名 「ここを走れば」(きみがいちばんひかるとき6年 光村図書)
(C-(12) 規則の尊重)

3 本時の目標

危篤の祖父のもとへ向かうときに交通規則を守る父親と、その姿を見つめる「ぼく」の姿を通して、人間の心の弱さを理解しながらも、きまりを守ることは、みんなが安全かつ安心して生活できる社会につながることを理解し、日頃から進んできまりを守ろうとする心情を育てる。

4 目指す子供を育てるために

(1) 子供の実態
・本学級は素直な子供が多く、学校や学級のきまりは守るべきものとして理解している。修学旅行に向けても、自分がきまりを守るのはもちろん、廊下を走る人に声をかけたり、コロナ対策としてマスクの着用や3密を避けるよう呼びかけたりするなど、全体の意識を高め、いつでも誰でもきまりを守れる集団になろうという考えをもつ子供が多い。
・一方で、遊びや行為に夢中になり、きまりを守るという意識が弱くなったり、教師がいないところではきまりを守れていなかったりするなど、何のためのきまりなのか深く考えていない子供も多い。

(2) 教材について
・本教材の概略は以下のようになっている。
離れたところに住む祖父が倒れたという知らせを受け、「ぼく」や父は車で向かうが、高速道路で事故による渋滞に巻き込まれる。路側帯を通り過ぎる車を見て、急いでいるのだから路側帯を走ればいいのと思う妹や「ぼく」であるが、父は走ろうとはしない。病院に到着したときに祖父はすでに亡くなっていた。
・本教材は、葛藤的要素を含んだ教材である。本時では、主人公を自分と置き換えて自我関与させながら、危篤の祖父のもとへ向かうときでも交通規則を守る父親と、その姿を葛藤しながら見つめる主人公の姿を通して、きまりは何のために存在するのか、そして何を大切にきまりを守ろうとするのか考えさせるという視点で教材を活用する。

(3) 手立て
「まなボード*」を活用することで価値観が見える化し、対話を通して考えを深める場の設定
個々の考えを付箋に書き、「まなボード」に貼る→チャートを活用し仲間分けをする→「まなボード」にシートをかぶせ、対話しながらキーワードや気付いたことを加筆し考えを深める
個々の納得解を引き出す問い
「父は後悔しているのか」「きまりはどんな状況でも守らなければいけないものなのか」「父には路側帯を走るという気持ちは全くなかったのか」等の補助発問や問い返し

(4) 目指す子供の姿
問題解決的な学習展開、葛藤状況についての丁寧な対話を通して、きまりの意義について多面的・多角的に捉え、考えを深めながら、きまりを守ることの身構えを自己の生き方につなげていく姿。

主に働かせる見方・考え方
・きまりの意義について広い視野から多面的・多角的に捉え、人間的に自己の生き方に関わ

* 「まなボード」とは、スチレンシートの上に書き込み可能な透明シートが被せられたもの。スチレンシートに貼った教材に透明シートを被せ、自由に書き消しでき、黒板にも貼ることができる。詳細は下記のURL参照
<https://izumi-cosmo.co.jp/manaboard/manaboard.html>

5 本時の学習

(1) ねらい

危篤の祖父のもとへ向かうときに交通規則を守る父親と、その姿を見つめる「ぼく」の姿を通して、人間の心の弱さを理解しながらも、きまりを守ることは、みんなが安全かつ安心して生活できる社会につながることを理解し、日頃から進んできまりを守ろうとする心情を育てる。

(2) 学習指導過程

○主な発問 ●中心発問	予想される子供の発言・思考	教師の関わり ◎評価 教師の手立て
<p>1 身の回りのきまりについて考える。</p> <p>○身の回りにはどんなきまりがあるだろう。</p> <p>○きまりは守れているだろうか。守れないのはなぜだろう。</p>	<p>・廊下を走らない。</p> <p>・3密を避ける。</p> <p>・信号を守る。</p> <p>・廊下はつい走ってしまう。</p> <p>・何かに夢中になってしまふときは、守ろうとする意識がなくなる。</p> <p>・悪いと思っても他の人もやっているから。</p>	<p>・校内外の身の回りがあるきまりをいくつか想起させ、どれくらい意識して生活しているかを考えさせる。</p> <p>・きまりを守って生活しなければならぬ気持ちはあっても、守れない心の弱さもあることに気付かせることにより価値への方向付けを図る。</p>
<p>きまりとは何だろう。</p>		
<p>2 教材「ここを走れば」を読んで、話し合う。</p> <p>○父が規則を破ることができないと言ったときに、ぼくはどんなことを考えていたのだろうか。</p> <p>○父の涙にはどんな思いが込められているのだろう。</p>	<p>・路側帯を走れば、間に合うかもしれないのに。</p> <p>・おじいちゃんに早く会いたい。</p> <p>・何で路側帯を走らないの。お父さんは心配じゃないの。</p> <p>・路側帯を走っている車もあるのに、そんなにきまりが大事なの。</p> <p>・お父さんも苦しいのに、尊敬する。</p> <p>・自分の父に生きているうちに会って話をしたかった。</p> <p>・これでいい。まちがっていない。</p> <p>・きまりを破って会えたとしても、おじいちゃんは悲しんだはず。</p>	<p>「まなボード」を活用することで価値観が見える化し、対話を通して考えを深める場の設定</p> <p>・グループ毎に「まなボード」を活用し、付箋を貼ることでそれぞれの考えを見える可して整理させる。その後、キーワードや気付いたことをペンで加筆させ考えを深めさせる。</p> <p>・自分だったらという視点で自我関与させる。</p> <p>個々の価値観の再考を促す問い</p> <p>・「父は後悔しているのか」「きまりはどんな状況でも守らなければいけないものなのか」「父には路側帯を走るといふ気持ちは全くなかったのか」等の補助発問</p>

<p>○父が大切にしていたこととは何だろう。</p> <p>●きまりとは何だろう。</p>	<p>・天国でおじいちゃんが、「よくやった」と言ってくれたと思う。</p> <p>・救える命。自分の家族の命も大切だけど、事故に会った人をきまりを守ることによって救えるかもしれない。</p> <p>・自分を優先するより、みんなの安全。</p> <p>・きまりはみんなの安全のためにあるもの。自分勝手は許されない。</p> <p>・きまりは命を守るためにあるもの。</p> <p>・きまりを守ることによってみんなが気持ちよく過ごせる。</p> <p>・決してきまりを守ることが簡単ではない。日頃から意識を高めなければいけない。</p>	<p>や問い返しにより、無念さへの共感から、価値ある行為への肯定、尊敬の念を高める。</p> <p>・父の深い判断の根拠やその良さに気付かせる。</p> <p>・テーマと同じ問いを投げかけることにより、価値観の再考を促し、思考や認識の深まりを実感させる。</p>
<p>3 自己の生き方について考える。</p> <p>○これからの自分の生き方について考えてみよう。</p>	<p>・きまりはみんなが安全に暮らすためにあることだと思う。また、自分を優先すると後で後悔することが分かった。</p> <p>・きまりが何のために何を目的にして作られているのかが分かった。自分の理由をつけてきまりを破っていると、言い訳だらけになってしまうと思う。</p> <p>・「こんなきまりはなくていい」と思っていたことでも、みんなのためにあるんだということが分かった。これからは、何のためのきまりなのか考えていきたい。</p>	<p>◎人間の心の弱さを理解しながらも、きまりを守るとは、みんなが安全かつ安心して生活できる社会につながることを理解し、進んできまりを守ろうとしている。</p> <p>(発言・道徳カード)</p>

6 授業の考察

(1) 授業者から

きまりを守るとは、みんなが安心して生活できる社会につながることを理解し、日頃から進んできまりを守ろうとする心情を育てることをねらっていたが、その時の状況によってはきまりを守れないこともある、というような考えも出された。「命」や「またとない機会」というものと、「きまり」のどちらが大切なかを比べた子供もいたため、きまりを守らなくてもよいという考えに至った子供もいたが、ワークシートの記述を見ると、きまりを守ることが大切だという考えに至った子供が多かった。

(2) 道徳カードの記述から

- C 1…私は大切な人が事件に遭ったりしたら、お父さんのようにきまりを守れないと思います。どうしてかという、大切な人と最後まで一緒にいたいからです。なので、お父さんはとてもすごいなと思いました。
- C 2…きまりはみんなが気持ちよく過ごすためにあるものだから、きまりをやぶってはいけないと思う。緊急事態などの時はしょうがないという思いはあるけど、きまりは守らなくてはいけないと思う。
- C 3…人のためを考えることにはいろいろあるということがわかりました。私はきまりを守ることを優先したいです。
- C 4…ルールは絶対に守らなければいけないし、緊急事態だとしても、周りの人も困っているのだから、ルールに従わなければならない。

C 1は、登場人物のお父さんに自我関与して、きまりを守ることの難しさについて考えることができています。C 2, C 3, C 4は、きまり守ることの意義（他者への思い、社会全体の利益）について深く考えることができていた。

(3) 提案内容についての話し合いから

- ①「まなボード」を活用することで価値観が見える化し、対話を通して考えを深める場の設定について

- ・「まなボード」を使って自分の考えを書く際の視点が、「自分と重ねて」ということであつたが、それで良かったのか。まず、「ぼく」に対して自我関与させてからの方が良かったのではないか。「まなボード」の活用場面、段階を工夫する必要がある。
- ・Yチャートにより意見を整理していったことで、それぞれの立場がわかりやすく、子供の思考の助けになっていた。
- ・他の人の命を守る＝きまりを守る、ということを理解していたと思われるが、視覚的に分かるよう板書した方が良かったのではないか。
- ・「父が大切にしていたこと」がそのままねらいに迫るものであり、Yチャートで整理していた考えから、話し合いを通して、一步深まった考えになっていた。

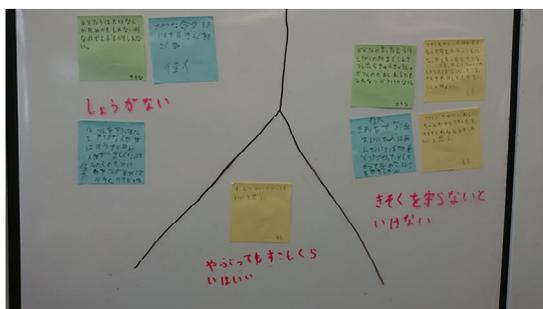
「まなボード」活用の様子



- ②個々の価値観の再考を促す問いについて

- ・子供が命について言及したときに、きまりということに焦点化させるために、効果的に問い返しを行っていた。
- ・三者での話し合い、全体での話し合いでも、自分の考えを積極的に発表している子供が多く見られた。

Yチャートによる板書



7 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ①「まなボード」の活用により、書くことで個々の意見を表出させることができた。その後、Yチャートを活用し、個々の立場を明確にさせることができた。そのことが子供の思考の深まりに繋がった。
- ②きまりを守ることの良さに焦点化させるために、「きまりはどんな状況でも守らなければならないのか」等の問い返しをし、子供の思考を整理しながら話し合いが進められた。

(2) 課題

- ①「まなボード」は思考を整理したり、書くことで交流できるツールではあるが、使う段階、自分の考えを書く視点や活用の仕方を明確にさせることで、より効果的な活用法を工夫する必要がある。
- ②子供が「きまりを守る」という道徳的価値については理解していたが、その中できまりを守る難しさについても考えさせる必要があつた。また、きまりを守ることが、社会全体の利益に繋がることが、子供達にとって気付にくい教材でもあつたので、その点を気付かせられるような具体的な発問も考えておく必要がある。

本時で目指す授業

手品師の心の葛藤を多面的・多角的に考えることを通して、誠実に明るい生活を送るために必要な見方・考え方、割り切れない気持ちなどを引き出し、自分自身との関わりで誠実な心を見つめ直そうとする心情を育てることを目指す授業。

1 主題名 自分の中にある誠実な心

2 教材名 「手品師」(新・みんなの道徳5年 学研教育みらい) (A-(2) 正直・誠実)

3 目指す子供の姿に向けて

教材で目指す子供の姿

手品師の葛藤や決断について話し合うことや、自分自身との関わりで誠実な心を見つめ直すことを通して、自分に対してうそ偽りのない生き方をしていこうとする姿。

本時の手立て

価値観が見える化(三者の立場に分類)する問いの設定

- ・手品師の行動をもとに①大劇場に行く手品師, ②男の子の元へ行く手品師, ③迷いに迷っている手品師, どの手品師を支持するか, そして, 三者の立場から手品師の気持ちを考えさせる。

価値観を再構成させる問い

- ・誠実に生きることに対して, 三者の立場から多面的に考えさせることを通して, 男の子のもとに行くことだけが誠実ではないことや, 手品師が自分の心に正直に, 誠実でいたいという思いから男の子の元に行くことを選択したことに気付かせる。

主
に
働
か
せ
る
見
方
・
考
え
方
で
、
誠
実
に
生
き
る
こ
と
に
つ
い
て
、
道
徳
的
価
値
の
理
解
を
基
に
自
己
方
の
関
わ
り
考
え
る
こ
と
で
、
広
い
視
野
か
ら
多
面
的
・
多
角
的
に
捉
え
、
人
間
と
し
て
の
生
き
方
に
つ
い
て

教材について

(本教材のあらすじ)

売れない手品師が、母の帰りを待つ男の子に手品を披露し、明日も来ると約束した。その夜、大劇場の誘いがあったが断り、手品師は男の子との約束を守った。

- ・男の子と先に約束したから、それを守ったという「規則の尊重」の授業とならないように、誠実に明るく生きるために約束を守ったという観点を明確にする。
- ・手品師が男の子との約束を守ることは男の子に対して誠実であると同時に、大劇場へ行くことは自分の夢を叶えたいという思いに誠実であると考え。また、男の子のもとへ行くのか、大劇場に行くかということ悩んでいる手品師の姿、気持ちそのものが誠実だという視点でも考えさせていく。そして、男の子のもとへ行ったのは、男の子に対しての同情からではなく、手品師自らの心、誠実に生きたいという思いからであることに気付かせていく。

子供の実態

- ・物事を解決する際、利害損得を基準にして選ぶ傾向にある。
- ・自分の立場を優先して、相手に責任転嫁することがある。
- ・自分の都合が悪くなると、言い訳をしてごまかすことがある。

5 本時の学習

(1) ねらい

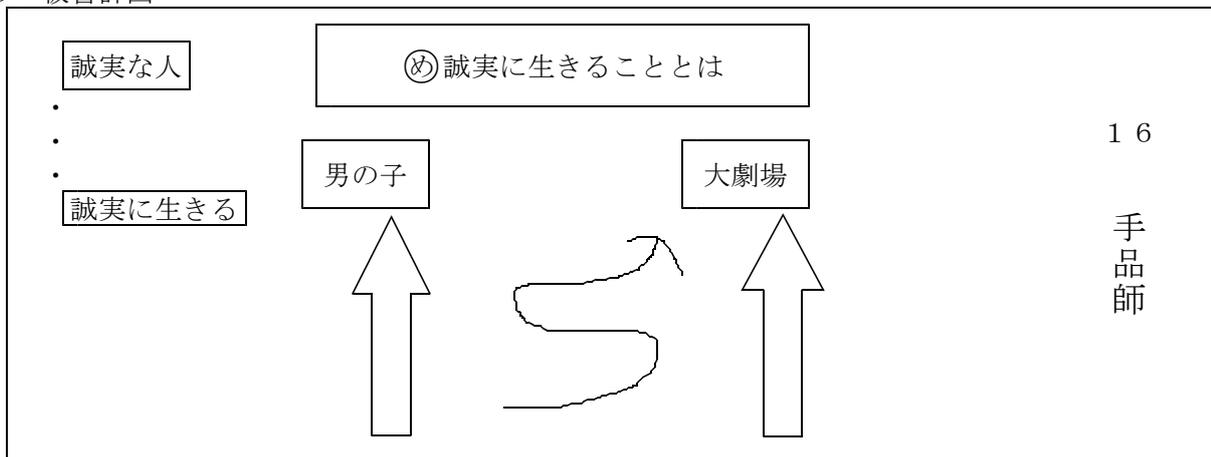
手品師の葛藤や決断について話し合うことや、自分自身との関わりで誠実な心を見つめ直すことを通して、自分に対してうそ偽りのない生き方をしていこうとする心情を育てる。

(2) 学習指導過程

○主な発問 ●中心発問	予想される子供の発言・思考	教師の関わり ◎評価 教師の手立て
<p>1 「誠実」のイメージについて共有する。</p> <p>○誠実な人とはどんな人でしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・嘘をつかない人 ・約束を守ってくれる人 ・裏表がない人 ・まっすぐで優しい人 ・ぶれないまっすぐな人 	<ul style="list-style-type: none"> ・「誠実な人」に対するイメージを共有させることによって、価値への方向付けを図る。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">誠実に生きることとは</div>		
<p>2 教材「手品師」を読んで、話し合う。</p> <p>○手品師が男の子と約束したのはどのような気持ちからか。</p> <p>○手品師は、友人から誘いの電話を聞いてどんなことを考えたか。</p> <p>●どの手品師が誠実なのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりぼっちでかわいそうだな。 ・両親がいない男の子に同情したから。 ・元気づけてあげたいという優しさ。 ・明るく元気になってほしいという気持ち。 <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <ul style="list-style-type: none"> ・迷うなあ。どちらも捨てがたい。 ・男の子と約束をしているからなあ。どうしよう。 ・男の子との約束はあるけど、大劇場に行きたいな。 ・すごいチャンスだ。大劇場に行こう。 ・男の子が悲しむから、男の子の方へ行こう。 ・男の子との約束を守らなければモヤモヤする。男の子の方へ行こう。 <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <ul style="list-style-type: none"> ①大劇場へ行く手品師 <ul style="list-style-type: none"> ・大劇場へ行くことは、ずっと前からの自分の夢であるから、自分に誠実だから。 ②男の子の元へ行く手品師 <ul style="list-style-type: none"> ・男の子の前で手品をすることで、自分の心を満足させることができるから。 ③迷いに迷っている手品師 <ul style="list-style-type: none"> ・どちらも決めきれないでいるが、夢に対しても男 	<ul style="list-style-type: none"> ・男の子の恵まれない生い立ちや現状に自我関与させるようにする。 <p>価値観を見える化（三者の立場に分類）する問いの設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「迷っている手品師」の様子から、①大劇場に行く手品師、②男の子の元へ行く手品師、③迷いに迷っている手品師の三つの立場に焦点を当て、それぞれの立場での手品師の気持ちを考えさせる。 <p>価値観を再構成させる問い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの手品師を支持しても、それぞれが誠実という観点に対して多面的・多角的に考えられるようにする。 ・②を支持する子供が、「かわいそう」「先に約束をしたから」などの発言した場合は、「手品師は仕方なく少年の元へ行ったのか」等の問い返しをし、手品師自身の「自分の思い」に対す

<p>○翌日、男の子の前で手品を披露している手品師はどんな気持ちだったでしょう。</p>	<p>の子に対しても真剣に向き合っているのだから、誠実だ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すがすがしい気持ち。 ・さわやかな気持ち。 	<p>る誠実さに気付くことができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誠実に行動することのすがすがしさを感じ取ることができるようにする。
<p>3 自己の生き方について考える。 ○「誠実に生きる」とは、どういうことだと考えましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のことをよく考えて、真心をもって接すること。 ・いろいろな選択肢があったときに、自分が後悔しない選択ができること。 ・自分の心がさっぱりときれいになるような生き方。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を通して学んだことを道徳ノートに書かせる。 ◎自分自身との関わりで誠実な心を見つめ直すことを通して、自分に対してうそ偽りのない生き方をしていこうとしている。 (発言・道徳ノート)

6 板書計画



6 授業の概要及び考察

(1) プロトコルからの考察

価値観が見える化（三者の立場に分類）する問いの設定について

- T: (教材の範読)
C: 子供の方に行くのを誠実っていうんじゃない。
C: ぼくは大劇場。
T: みんな話し出しているから、どっちに行きたいか聞いてみようか。
C: (大劇場12人, 男子17人)
T: 男子と約束したのはどんな気持ちからでしょうか。
C: もっと子供を喜ばせたい。どうやったら喜ばせてあげられるかなあ。
C: 別な手品を見せてあげたい。
T: 電話来たときどう思ったの。
C: 子供のことを思い出して男の方に行きたいと思った。
C: 迷った…男子の方に行こうと思ったけど、電話が来たから
C: 手品師にとっても…大劇場
C: ご飯食べるのもやっとなのに。将来がかかっている。
T: 迷ってる手品師はどうなんですか？
C: 迷ってる時点で駄目
T: 他の人は、迷ってる手品師をどう思いますか。苦しい手品師はどのなの？
C: それは決められない。

C:迷っているのも誠実
 C:迷うのは、その人のことを思っているから。
T:その人というのは誰ですか？
 C:男の子と友達
 C:迷ってるって時点で男の子を考えている。
 C:大劇場に行くのは手品師の欲が見える。
T:どの手品師が誠実なんですか？
 C:どれが誠実って言われると、どれも誠実じゃない。
 C:少年に会いに行ったとしたらチャンス逃したことを後悔する。大劇場に行ったら、少年に手品を見せればよかったと後悔する。迷っているのは、どちらも選べなかったことに後悔する。
 C:どれかって言われると男の子。
 C:大劇場は自分にまっすぐ。
 C:男の子の方は約束を果たすという意味で誠実。
 C:迷うのは、人に優しくしたいという思いがあるから、その面で誠実。
 C:全部誠実かな？

子供達の発言を取り上げながら、問い返すことによって、三つの立場における誠実について考えさせることができた。その際、「その人というのは誰ですか」という発問によって、相手ははっきりしたことで、誰に対しての思いなのかが焦点化され、子供から多面的・多角的な意見が引き出されていた。

価値観を再構成させる問いについて

T:手品師はどんな心をもってたんでしょうか。
 C:誠実な心
 T:もう少しはっきりさせたいなあ、別な言葉で言い換えると？
 C:正直な心、自分にまっすぐということ
T:自分にまっすぐってどういうことかな？
 C:男の子の方に行かないと自分が納得できない？
 C:自分の気持ちかもやもやしないことかな。
T:自分で決めた手品師ってどうなの？
 C:手品師は結局自分で決めているから、男の子の方に行くというのが誠実だと考えて行動した。
 C:自分で男の方に行く方が気持ちがさっぱりするというか。
 C:自分でそれが誠実だと納得して行動していると思う。

より深く手品師に自我関与させることと、方法論だけで議論しないような展開にするために、手品師の行動だけではなく、行動のもととなる思いに着目させるような発問をした。そこから、「自分にまっすぐ」という事に気付かせ、誠実に生きるということは、他との関わりよりも自分の心のもちょうや納得感が重要であると考えることができた。

また、導入時に「誠実な人とは」という問いに対し、「良い印象」「約束を破らない」「悪い嘘をつかない」「自分にまっすぐで正直」など、子供それぞれの誠実に対するイメージが表出されたが、学習を通して、自分事として捉え、より深く考える様子が見られた。

7 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ① 三者の立場に分類する発問と板書によって、手品師に深く自我関与し考える姿が見られた。揺れ動く手品師の立場で誠実について考えさせることができた。
- ② 価値観を再構成させるためには、子供の発言の曖昧な点を問い返し、はっきりさせてあげることが大切である。それが子供の新しい価値観の形成に繋がっていった。

(2) 課題

- ① 一つの発問に対して、子供の発言が様々に出される中で、どの発言を生かし、どのような問い返しが効果的なのかを判断し、意図的に発問することが大切である。その土台となる教材分析が今以上に重要である。
- ② 価値観を再構成し、子供それぞれの立場で深く考えることはできたが、どの行動もそれぞれ誠実な面があると捉えた子供に、「より高次の誠実は」と問うことで、より深く考えられたのではないかと考える。多様な価値理解のさらに一段階上で、多面的・多角的に考えさせられるような発問をすることで、よりねらいに迫っていくようにすることが大切である。

(浅利 善仁)

Ⅲ これまでの実践から明らかとなったこと

1 成果

これまでの実践からの成果は、以下2点挙げられる。

1点目として、今回の実践では、「まなボード」を活用した意見の見える化、発問や板書によって価値に対する多様な考え方を見える化することを実践し、検証した。

実践①における、「まなボード」の活用は、書くことで個々の現状の価値観を表出させ、交流させることで集団で一定の納得解を導き出すことができた。また、Yチャートの活用が板書にも反映され、一人一人の立場を明確にし、議論するための土台作りに有効であったと言える。実践②における発問と板書は、価値に対する多様な考え方を見える化し、深く自我関与させながら考えさせることができるという点で有効であった。それぞれの授業における役割は異なっているが、考えを整理し、多面的・多角的に考えさせ、対話を促す一つの手立てとして有効であったと言える。

2点目として、価値観を再構成させる問いということで、中心発問の他、授業の中で子供が考えるであろう反応を予想し、補助発問や多くの問い返しを準備して授業を構成したことである。それにより、対話を通して、子供個々が多面的・多角的に考えることができた。友達の意見を共感的に理解し、自己の考えを見つめ直すことで価値観の再構成に繋がったのではないかと考える。

2 課題

これまでの実践から、上記のような成果が見られたが、以下の2点の課題が見つかった。

1点目として、「まなボード」などのツールの活用についてである。価値観を見える化するという点で、思考を整理したり、書いたりすることで交流できるツールではあるが、書く視点や活用の仕方が明確でないと、授業の展開を妨げることもある。ただ、価値観の見える化を目指す上で、ツールの活用は新たな可能性があるため、次年度への課題としておく。

2点目として、発問についてである。発問は、価値観の見える化、価値観の再構成のどちらにも深く関わるものである。道徳的価値を様々な側面から考え、ねらいに迫るためには意図的な発問や問い返しが不可欠である。しかし、意図が明確ではない発問や問い返しもあり、流れの中でどのような発問や問い返しが有効であったかを検証して、初めて気付かされたものもあった。子供の発言は多様であり、こちらの予想を超えるものも見られる。その不確定な要素にも柔軟に対応できる発問、問い返し、その土台となる深い教材解釈が重要である

(浅利 善仁)

【参考文献】

浅見哲也 こだわりの道徳授業レシピ，東洋館出版社，2020

『道徳教育』5月号，明治図書，2020

『道徳教育』9月号，明治図書，2020